

初産妊産婦における母親になる心理過程

——身体的変化との関連において——

三宅朝子

I. 問題と目的

女性のライフコース上の心理的な節目になる時期は、初潮、妊娠・出産、閉経という、身体の変動の激しい時期と一致しており、相互に問題が影響しているものと思われる。中でも、妊娠・出産期は10カ月という限られた期間に身体、生理の急激な変動の生じる時期である。Bibring (1959) は、身体的変化に始まる自己への関心が高まる心理的变化を含んだ危機の時期としている。細井 (1981) は、胎児を自己の身体の一部として捉える母子一体感から「胎児に対して」という対象愛傾向への移行について述べ、蘭 (1978) は身体知覚の平行する妊娠・出産の情緒的变化のプロセスを説明している。武内 (1982) は胎動を中心にした身体感覚的母子相互作用の重要性を指摘し、これにより母親になる心的準備がなされるものとしている。

本研究では、上述の研究が指摘するように身体の変化による心理的变化を母親になる重要なプロセスの一つと考え、その経過をより詳細にするとともに、妊娠当初の気持ち、環境など様々な条件との関連を検討したい。そして、これらは女性が自らの生き方の中で母親になることをどう受けとめていくのかという視点に立つものであり、妊娠以前の生育史的なところ（特に実母との関係）とも関連して検討を試みる。

調査1ではその変化をより医学的な知見もふまえて横断的に捉え、その結果もふまえて調査2では身体的な変化（体形の変化、胎動などを中心に）とその受けとめについて、他の様々な要因の個におけるウエイトや相互関連をみていくというような探索的な検討をする。さらに、投影法を用いて、妊娠・出産にともなう身体の変化の過程と内的なより深層レベルでの受けとめについて検討することが目的である。

II. 方法

調査1では、愛知県下の病院、保健所に通所、通院している妊婦163名を対象として、体形と胎動について、快と好ましさの2項目（5段階評定）を用いた質問紙と自由記述の調査を実施した。調査2では、調査1の被験者の中から、面接の依頼に応じてくれた、妊娠後期にあたる初産の妊産婦19名を対象に3つの時点（妊娠中、出

産1週間後、出産1カ月から2カ月の間）で主として準構成的な面接調査をおこなった。さらに、調査3では、調査2の被験者19名の中で、心理検査の依頼に応じてくれた被験者9名を対象に投影法（Rorschach Test）を実施した。

III. 結果と考察

1. 出産前の体形の変化と胎動の受けとめ

調査1による横断的接近では、体形や胎動が医学的に顕著な変化を示し始める頃と対応する形で心理的な変化もみられていることが明らかになった。体形の変化は、子宮内の羊水量が最大になる妊娠7カ月頃から大きく変化をし、そのあたりから妊娠8カ月頃は胎児の体重増加のめざましい時で、この頃胎動も最も強く頻繁に起きる。このような妊娠7、8カ月頃の身体的変化に対して、快の次元では必ずしもこのような変化が快感に通じるわけではなく、むしろ得点は妊娠前期などと比べて若干低下しネガティブになっている。しかしながら、好ましさの次元ではそれとは違いポジティブになっている。さらに、自由記述の分析から体形の変化に対する反応を見ていくと、妊娠5、6カ月まではポジティブな反応としても漠然としてもものが多く、体形の変化が「胎児の存在の確認」としてみられていたりしている。それが、7カ月からは「胎児の成長のめやす」として受けとられている。胎動に関しても8カ月における快—不快と好ましい—好ましくないに次元に差がみられ好ましさが増している。自由記述からは、胎動が7カ月以降では「胎児の存在の確認」として受け取られ、9カ月で胎動によって「母親としての自覚」が出てくる。

経産との比較で初産妊産婦の特徴を見てみると、武内 (1978) が指摘した初産における妊婦の perspective のなさが、本研究においてもみられている。これは経産では全くみられず、初産特有の特徴として示された。経産の場合、妻、主婦、妊婦という役割の上にさらに長子の母親という役割が負荷され、今回の妊娠・出産の受けとめにも長子との今までの関わりの先行経験が影響しているようである。そしてそのためにそれなりに乗り越えていけそうという見通しにつながっているようで、このような見通しを付ける材料不足のために、初産の方が

不安が高くなっているものと考えられる。

2. 出産前後の妊娠・出産の受けとめについて

体形の変化に「苦痛」を感じたり、胎動に対して「人間の胎児としてのイメージがうかばない」とし、悪阻から「嫌悪感」を感じる人も居れば、これらの身体の変化に対して「母親としての自覚」を感じるなど妊娠のプロセスの一つという意識を持つ人もいる。このような差をもたらす要因として、妊婦の勤労、公的な婚姻の有無、年齢、妊娠の予定、体質、子供を持つことへの価値観などいろいろな要因の可能性が探索的にみいだされた。

悪阻が重度である場合、それに対して「出産に必要なこと」として受けとめるものと「嫌悪感」を持つ者とに分かれ、後者はその後体形の変化にもネガティブであった。また、妊娠を予期もしくは待っていたもので体形の変化、胎動にネガティブになっているものはおらず、妊娠を迎える心的準備ができていないものは、他の色々な要因によってその受けとめに差がみられた。その中でも、妊娠による行動制限が主の理由であったり、母親になることにあまり価値を見いだしていないものは、体形の変化、胎動にネガティブになっている。さらに、出産後、母親として子供のことを考える余裕がなく出産による母体の疲労感について述べている者は、出産前の身体の受けとめについてもあまりポジティブではなく、その後の育児活動においても、子供との関わりを楽しむのが若干低くなっている。

また、妊娠時に自分がどんな母親になるのかということとをどう考えているのか等、母親としての自己像の形成過程から3群（内1群は2タイプに分かれる）がみいだされた。それと、生育史、実母との関係について検討したところ、積極的に母親としての自己像を形成しようとしている者は、思春期に母親に反発するなど実母を改めて見つめ直す作業がなされている。また、母親になることにあまり価値を置かずあらかじめの指針もなく実際の育児の中で試行錯誤でやっつけようとする者は、その実母の関係は、幼少期より母子の間に距離があり、実母から早い時期に1人の個人として子供の自由を尊重されて

育てられていることが明らかになった。身体の変化から胎児をイメージしたり、母子一体感を形成することには、このような実母との関係が下地となっているであろうし、それがその後の育児活動にもなんらかの影響をしているものと思われる。しかしながら育児をするうえで妊娠期の胎児イメージ化不足が不適応につながると考えるのは早計で、逆に母子一体感が強すぎて適切に母子分離のできないケースも考えられる。母親自身の生育史、妊娠出産の受けとめとの関連でいろいろなタイプの母親の育児の仕方、子供への関わりかたも今後検討すべき課題であろう。

3. 投影法的接近（妊娠・出産と Rorschach Test）

妊婦の Rorschach Test の反応として特徴的であったのは、身体に関連した反応が多いことである。それとともにレッドカラーを始めとする色彩に対して敏感であり、血液反応もみられやすい。これらは、妊婦における自己の身体への関心の高まりや、身体の変化に伴う不安感の反映のように思われる。特に Card II は妊娠・出産に関連した、そのプロセスを象徴的に表現したような反応が見られやすいことがあきらかになった。その理由としては、この Card がレッドカラーが初めてみられ、その形態が他の Card に比べて「骨盤」に知覚されやすいなどが考えられる。またこの Card II は人間反応もみられやすいことから、胎児との関わりも投影されやすいようにも思われる。

Self Image Card を reject したものが、7名中3名みられ、さらにこの3名全てが、面接調査においても母親としての自己像の未形成群に該当している。初産の妊婦は母親になるという新しい役割形成の過渡期であり、自己イメージが曖昧になっているものと考えられる。そしてこの Self Image Card に母親としての自己イメージ形成の一端がある程度反映されるのではないだろうか。母性衛生の面から、Rorschach Test の臨床実践への活用を考えると妊産婦に負担をかけない簡便な方法として、Card II だけの試行の検討も意味深いように思われる。